



繪本甲越軍記三編  
十一

3  
2258  
35



池清

門達13  
番2258  
巻95



繪本甲弑軍記三編卷之十一

目錄

鰐ヶ嶽陥落之事

上杉謙信武田信玄が約と變じらるる情事

辻六郎玄清血戦之圖

武田上杉川中崎出陣之事

原松本勇戦之圖

武田信玄の配之事

上杉謙信の配之事

繪本甲弑軍記三編卷之十一



縣

繪本甲斐軍記三編卷之十一

釋ヶ山嶽陥落之事

第拾

斯く武田入道信玄之勢が山嶽の敵み喰止るは終るに海軍  
 仁科三将統後之荷腰の色は之れ狭く討て大車ありて耳  
 利左衛門尉お本市を兼射安間三郎右衛門尉備と名くして三将  
 と押へて先陣を以て統後の後詰の守備を籠本とす  
 山嶽を押し入り只一息に攻入んと搦め搦め責められも勇猛の統後  
 勢必令と情を弛出く防たれは武田勢死に多し武田勢は  
 り引く不と統後勢高小り引く退る系兼濃守入道加藤義行  
 昌頼引遠く城兵が道と進み猛火の燃くところ切て取ると  
 統後勢も美代と一助と名と情を引く道ありとも押付と入せりと



信玄軍勢を分る事

謙信敵の謀略と折る川中嶋出陣之事

謙信を城りて圖

信玄敵の陣備と見し陣と布事

川中嶋戦場之画圖



切まで遣一鶴が嶽の峰と攻落され一車と大に愕う十四箇年以陽暗信入道願又出後事次第と云數と信云は似合さる表裏の事勅免角言絶る急ぎ信州に出馬して平結の一戦と相々三三三は勝敗と決一暗信が首の對面一壯哉情と散せんよと齒と嚙と怒う自りふ字信美駿河も進も出作はよは去あう一先使と以信云が死と由て渠と怒う也其後沖出陣あは味方の利小いと練られ信實さうやと使と甲州よりこれ練信上を致し朝恩と謝せんが上洛と遂るの向某帰國あらん返出張と思ひ止る孫あや否哉と尋問の亦信云弓矢の美我とまられ杖くまう上を遠交有るあは我上洛と伺い大田切近乱入一鶴が嶽と攻らる条表裏の

車信

かりのひ候と良策と思ひ孫あは時國未練の亦あはらや左程謙信と思れ思われも我下小属一すこは謙信武の信義とより害とる事あはらるべと云送らまらん信云使のち趣と聞くと大に愕う愕れ謙信が言採ら其儀あは速に出陣一は一掃は踏凌さんと怒う孫あはと敵局兵部が浦山を入道大下孫あは是も謙信が君と仰り也有るの合戦と挑んとる練あは只お意の御善あはと怒う孫あはとやられ信云怒と止め孫あは謙信が中継り条其利あはら下我と深く怖れ上洛の箇主と執裁る向某ら美の情とあはら小下は下武州上州の諸士等北条氏原が領地へ乱入する中折斎氏原疾小犯され我小加勢とを小我下と約あはらと出陣を辞

1720

甲越721



甲越軍記巻之三

下  
六郎兵衛  
血戦の岡



甲越軍記巻之三

ころと金再三の頼政止ぐ敵徒と退く謀略は如馬とる不  
 が山嶽の味兵遮り我軍と防ぐ東越ふ責備と不あり信玄一  
 も不是我の心ありんぬ其必る國中は乱入し春日山にも書落さ  
 ら安うえりれども義と重んず帰國とる我す志あり然るに却  
 り我と恨らるる条甚憐れとあらた程某と思れらるんぬとんも  
 我縁若くは小糸が領國は軍と出し移ふど其必る原は只下は有  
 り我小糸とて養へ使と返されれば彌信益憤り其儀あら  
 一日も許りしむ信玄と戦ふ一戦と返すとど怒るまら  
 武田上杉川中鳴出陣の事之  
 永禄四年酉年八月十日上杉輝虎入道彌信と武田信玄と有  
 武の勝敗と変せん春日山と雷鼓一移ふお後ふんく小杉村

和泉守景家其指近江守景時直江山城を兼領在任誠意を  
 整長世同周防守何真山吉玄番九親章小糸安藤之長也  
 村上左衛門尉義隆安田上総介順易須田右衛門尉親満上田終理  
 進系國古志駿河守秀系守佐美駿河守定終守野たると介  
 和泉備後守小室平九郎安藤八郎玄清川田尉馬守和田在之清  
 石川備後守川田源二郎新發田尾張守同周備守松系之辰  
 守岩井弥治郎鬼小幡弥太郎奇藤下村守毛利上総介大園阿  
 野守輝部小田切治部少輔山本玄文子代喜川十郎安田輝部中  
 条誠意守ホとてめ勇助別率と引合其勢一万二子孫人信及  
 二打出く西條山は陣城と構へ只下小海津の城も攻渡さん信  
 小入てりる此も海津城の那代守坂弾正忠昌信と飛揚を

先代換

信玄

甲斐軍記三編卷十一

飛して甲府の庄進よりこれ信玄聞し石備りと彌信怒憤  
 又絶多出張とると覺へり世多の出陣容易ありとて絶て  
 勢と点檢ありて注進ありより身三日十八日小甲府と出馬  
 あり付ありが小人々々武回たり分信無武回と即義行候  
 局兵部少輔虎昌馬場民部少輔景政小山田備中も思辰耳  
 利左衛門尉晴吉信玄一徳存存陸入道同源を左衛門  
 信經同去兵部少輔尾張も信定然備三郎を信昌系穴山伊  
 豆守信良渡利式部源信音諸角豊後も思清山本勘助入  
 道及鬼武回道遠新系集人信昌勝跡部大炊介勝安内系  
 修理西昌豊小山田弥三郎信茂諸我大和入道長坂左衛門  
 射入道伯耆守田中時お木本市を信射今福若九郎人

甲斐 723

平八郎 獲用 駿河守 小幡次郎 右衛門 推名 山本 兵部 依回  
 六郎 小幡 弥宗 右衛門 豊沼 新三郎 奥平 元守 二浦 右馬介  
 孕石 主水 三浦 兵部 江間 常陸 守 今丸 弥左衛門 子川 豊彦  
 成牧 伊勢守 古畑 伯孝 守 小幡 貞右衛門 玄清 西巻 監物 渡辺 宗  
 右衛門 三科 肥前守 曲淵 左衛門 猪子 才助 上村 豊後 守 和  
 回加 助 渡部 三左衛門 石黒 弥三郎 監長 坂内 左衛門 久保 勘左衛門  
 志村 玄内 源川 左衛門 奥平 加賀守 小林 尾張 守 小山 田 弥  
 正系 徳也 守 加藤 丹後 守 木尾 張守 依田 新三郎 藤 沢 勘  
 玄清 小松 左衛門 木村 人跡 部 又玄清 津下 勘 玄清 米 宗 丹  
 後守 島 勘 加賀守 次郎 宗 勘 左衛門 乃寺 久助 花 形 民 部 左  
 衛門 本 部 駿 河 守 町 田 兵 部 上 泉 伊 勢 守 神 宗 圓 善 寺 尾 守



託

調

後より諸將諸勇士武万人と従へ浦中と押入る二十四日  
 猪馬場の小山當りより栗原山におよび移り流石川の流を  
 兩の文の海へと見下り見下り誠後の道と取切り又日討陣  
 移り信玄間者より西條山の上移り陣と候せ移り  
 誠後の軍勢より大石屋敷へ今信玄兩の文の海へと取切誠後  
 への通路と中びかぐの如くして目と近月と重なる兵船運  
 送の便り盡く飢死するの外ありと古隊將と始り士卒  
 皆是と憂へ顔色難く小使よりどりありと申すも大石上校  
 謙信と世とも移り移り移り移り移り移り移り移り移り  
 編と編と謙信自ら一挺鼓とあて笑語し馬んで陣を  
 武田の間者よりと澄し走る陣と世由と信玄小告げ

城

信玄上校が陣中の動靜と悉く一見し且時時思案し移り  
 一がまを拍と拍と我程の死地に入りあお思ろし謙信  
 離僧所が仕事あり早く陣替ありとて馬場民部が陣候  
 兵部山本勘助と互に謙信が動靜と移り移り移り移り  
 ころとつりおれ山本入道進とて居も間者より謙信が体と  
 あり大方も推考仕りあり作の如く速く小陣と換り  
 然るべく謙信和義の御君の委務と移りし上此度物と憂  
 移り事多きの恐恨は移り移り移り移り移り移り移り  
 と移り移り移り移り移り移り移り移り移り移り移り  
 移り移り移り移り移り移り移り移り移り移り移り  
 廣瀬の海へとお越し海津の城へ軍勢を入り九月廿日より

自本 以 お

九月廿七日又職合てぞ居りたる上松方小を信玄海津の城に  
引退れ敵後の通路自在を得し緒大将大に收び再び勇んで  
又り大將謙信を却り横越りしに乱奔も仕給つど  
唯然とて坐しりる武田が間者字海して馳帰り謙信始  
君の兼磨山由陣ありし時の体と變り教ふ不横越はれ  
とも軍勢共の收が事と大將と背腹はいと告りられ信玄完承  
中して方社思ひつる度とて沖きまを收めし時山本乃鬼  
進んぞ云りる先達より間者と武列上列の間はれは  
今日子帰るやひ謙信上列の緒大将等小冷し長時信法もち  
回三木斎道答倉子母六郎小幡和国等上松の一方を待軍と  
出さんと用意はる小由原とる不謙信時とる渠等小蝶合

謀

とて甲別入入とて却り我陣の後より突りし外知べ  
しどい様と君子く陣とをり謙信が謀略と折きゆと  
中たれば飯富兵部少輔虎昌進み出謙信軍と記してこそ小十  
又年毎幸信列の勢とあり事と有る一戦あり故あり一戦遠  
られ物とてお定謙信憤怒の出陣小は軍旅りやとさき  
う是味方其勝利の吉瑞はいとやられ馬場民部少輔とられ  
事如何ありと聞給折前代も一徳斎も軍議の為陣前  
小系ありしと偃小系とあり給ふる場代も小系ありしと成  
程沖一戦所を小系あり戦ひし士卒の勇き勝と制とる大  
將の謀あり故幸味方守拒の徳とあり給ふる士卒戦いと  
善の志あり兵機を善あり然れども謙信一討と仕換りた

つ

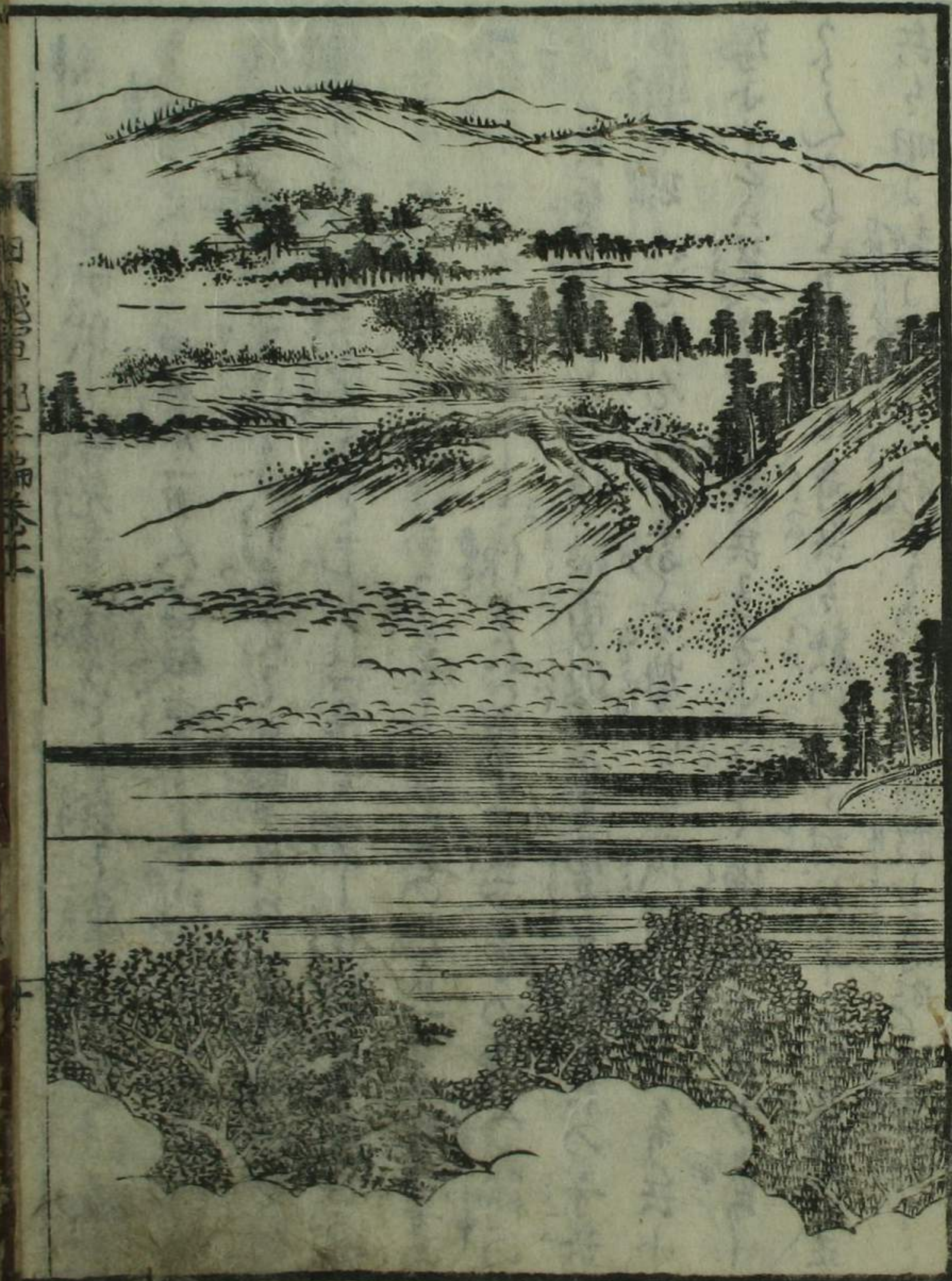
落は長持の仕業と見ゆして謀略ありき時と又別は信濃の利  
と殺け事小幡の勇ま弥壯んあれども志も多練の勇小幡  
らび其理の先年和平破る和厚と蒙り又十餘日の討伐は信  
信事小幡らば互に互に門と涉して合戦と始むべきはた  
して退去せり是其勝るもさうな事なり怒と思がぬあり  
只謀略と結して沖一戦始るべしとやられ信を打ちあがり  
世孫の中辺隈中よりと果も我家にて武功小幡とわ  
小幡山城入道日意らちるる方月は病死し系其濃入道信  
岩々鱗山城の城攻小十三ヶ所の痛きと蒙りて未だ平念  
せどしては連れざるも信の事なきと討れざる  
先は世方より戦いと始り西條山の陣城とすつる落せしは本

信濃

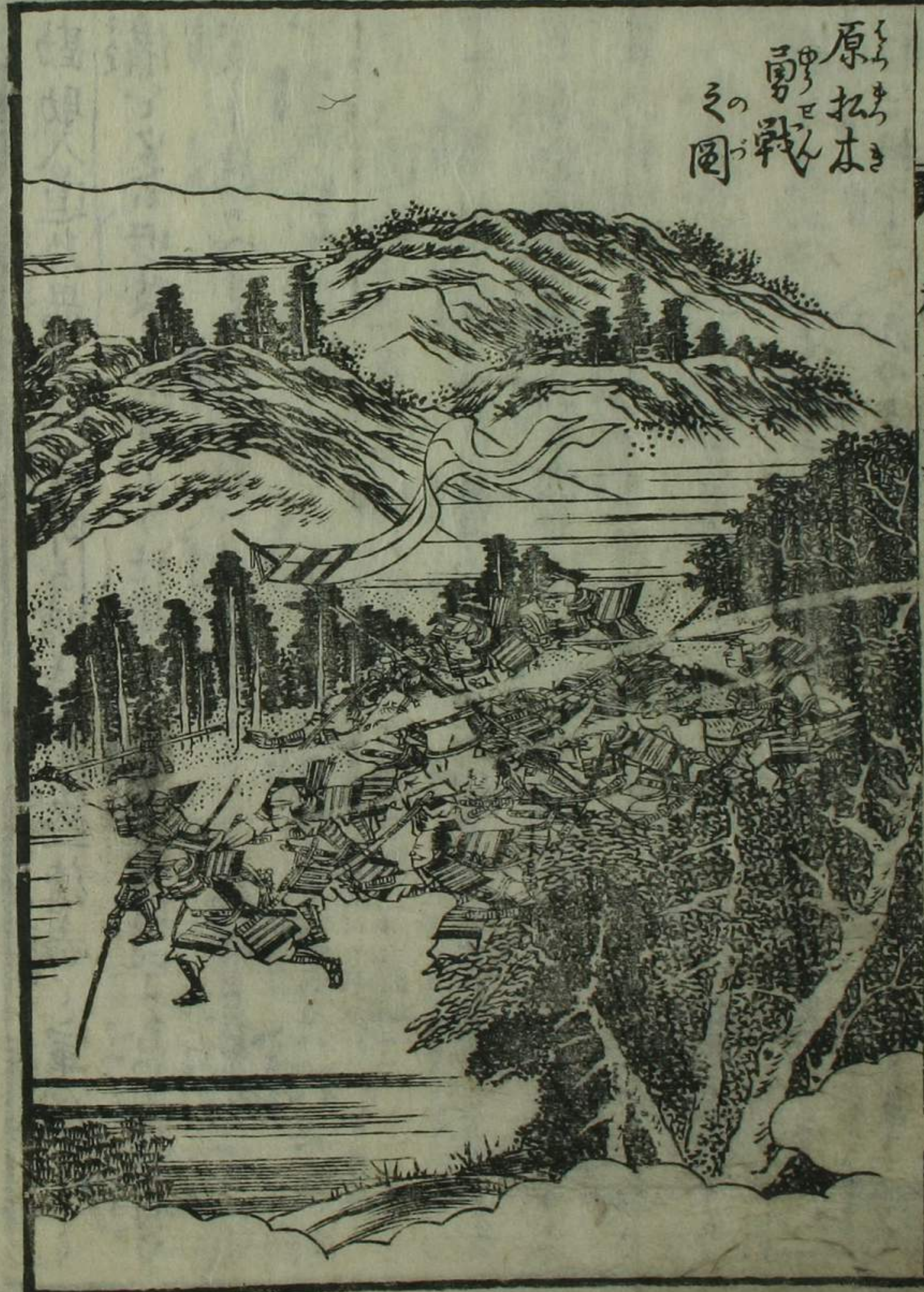
勘助入道乃鬼馬場民部少輔侍系多一徳守と軍儀あり  
備と定め世方より仕掛明日急よ西條山と急く勝負を  
変し物るべしと作りし道鬼畏つ馬場信貞と軍儀  
と定め山本河原より出る事其次第と申上りるは折世方輝  
虎入道謙信一万三千餘の軍勢と争ひ深く死地に入らんと  
んと思れど安とんる憂ふ是必死の想あり毎夜出ぬ家み歎  
此念の持物二戦又教せんと思ひ切給事なりあはれ大  
事の合戦しては先味方二千人の人数と二つに分て二万の勢と  
大正の備と一万の勢と以て大奇とて是川河原本なり  
斯く大正の士大将十頭と以て西條山と押あがり二つ一  
戦と挑中さるるに謙信勝ても負ても西條山とさるる西の

情

甲  
727



原松本  
の戦  
の図



甲越軍記三編卷十

子

又、後うと別紙一善光寺の後うと心合、犀川の方へ捕  
 り、如と大奇の旗本一万人と嚴重し、川中崎に待設け、  
 信が引取ると、最後より、列色人を攻撃、終り、必死、禪信と討  
 捕ひ、之、事、堂の中、又、いと、やり、れ、信、ま、あ、り、ら、れ、て、大、收、び、道  
 鬼が、中、不、疎、小、理、の、至、極、あり、ま、あ、り、大、正、の、勢、一、万、二、千、子、大、奇、の  
 旗本、八、千、人、と、ま、り、と、作、り、れ、山、本、が、ま、り、奇、の、沖、人、救、御、の、  
 通、は、い、の、勇、通、し、て、禪、信、が、極、勇、退、く、小、も、勇、ま、は、は、君、の、奇、兵  
 小、過、り、思、れ、ど、結、句、勝、小、あ、り、方、勢、い、う、と、戦、々、味、方、の、奇、兵、小  
 勢、小、し、て、は、ま、へ、る、は、兵、共、一、万、小、て、強、く、備、へ、終、り、ま、り、方、  
 う、し、う、や、ち、せ、と、も、奇、兵、も、敵、の、勢、と、対、は、八、千、と、ま、り、正  
 兵、も、明、敵、と、對、し、て、戦、ふ、の、あ、り、兵、數、あ、り、時、と、勇、ま、り、と

て正兵二万二千子人奇兵八千人と定り  
 武田信玄と配率  
 武田大膳を主膳信入道信玄と海津の城に於て山本勘介  
 牽入道乃鬼と正奇の謀略をすしてと配と定め、終り、大正  
 の兵として西條山に向ふ隊將中ら、坂、陣、心、大、昌、信、飲、局、と、部  
 か、捕、虎、昌、馬、場、民、部、少、捕、景、政、小、山、内、備、中、守、只、辰、守、利、方、信  
 門、尉、晴、吉、侍、系、多、幸、隆、入、道、一、德、壽、お、本、市、と、信、友、昌、吉、配、下  
 母、も、維、信、小、山、内、弥、三、郎、信、茂、小、幡、尾、張、守、信、定、の、十、頭、と、江、向  
 常、陸、守、推、名、八、丸、郎、小、幡、治、郎、右、衛、門、尉、崎、長、友、赤、門、後、込、六、郎  
 左、衛、門、川、井、八、左、衛、門、治、郎、右、衛、門、外、記、弥、八、郎、駒、沢、新、太、兵、衛、令、井  
 清、八、郎、長、崎、与、七、郎、平、山、出、羽、守、川、崎、七、郎、左、衛、門、録、内、市、と、應

日 武田信玄と配率

三

石見忠左衛門戸田時卿右衛門堤時市右衛門廣沢九右衛門小倉五郎右衛門小幡因幡守河野丹後守米倉丹後守島田加賀守須藤承物左衛門等の諸勇士都合して万二千人而條山の一番合戦と定め其秋子の初にお立ち明朝の初小合戦と並び謙信が堅陣と粉の如く小陣へと各勇人でお立ち大崎の備へ申す信玄正中より向ひ移るも備中へ飯沼三郎玄清射景左と武田左馬介信繁穴山伴豆守信良右と内藤修理心昌豊猪角豊後と昌清左の照備と原隼人依呂晴竹河孫六入道道遠軒右左郎義信望月三郎後備と跡部大炊介今福若九郎浅利式部九十二備と山本勘介入道初鹿源又郎原大隅守猪狩大和入道天野之丞右衛門真英他守河内守陸守

承左衛門市川梅印後河守安沼新三郎三浦玄部三浦右馬助乃石重水本所道齋松本兵部信国六郎吉畑伯耆守小菅又郎玄清西巻監物二月孫右衛門廣津卿右衛門三科肥前守曲淵左衛門猪子左衛門上野守後守乃石源右三石黒右衛門今福求女川左衛門左衛門本尾張守依田新左衛門藤沢勘玄清乃本尾人源下惣玄清と始め甲州の諸勇士共勢八子給人の日夜の世の初にお立ち謙信が首と得人軍と此戦ありと海津の城より河中守小押出し西小川より犀川より一里東の方三牧畑の坤の方小備と立戦後坂の退口と切崩し謙信が首と得人軍と此戦ありととく待る鬼も敷く信玄取土陣小山本勘介が謀斗と重子士大将の名小武田が勇将の名士

ノ敵

今日の合戦と一冊の時より勇まき日比より十倍せしむるありて天魔  
鬼神ありとも此堅陣猛威又敵とてき天と翔り地と踏む御  
らりともいつぞう一人も越後の地より入るべき搦も又へりり

上杉謙信の配車

却後上杉入道謙信も古今獨歩の名將ありて西條山に  
陣と構へ死地に入ると却て敵と死地に入るとしりる謀略ありし  
と武田入道信玄も敵の通路と切らんと糸磨山に陣と布  
置ひりり信玄又海内を渡り名將ありて謙信が勅信とて  
死地小有事と覺り速に海津の城より引退り死に名將の  
軍略へんゑの量り知るべき搦もあつりて又小謙信は法大の  
と呼び我十八歳の時より村上義清の死に信玄二十七歳の

ノ敵

時初と降と交へ法福寺佛神の合戦の合戦も馬場か  
此合戦能く過る皆何方針勝敗と落着せに信玄四十一歳我三  
十一歳して十一年の取合あり世に名將と稱せり  
信玄も首を獲る謙信討死とありて有事の一戦と遂に人もの  
と自らおとす猪俣と合し敵の勅諱と任儀あり九日の夜  
海津城と遙る後敵陣小畑の立上りと信玄は  
しと抄崎守代直江守輝たる介等と呼び宮内  
の目撃より戦いと信とて又へり我今日信玄が法師首を  
へき岡に見付得たりか定信玄明日も有事の一戦と遂に  
敵と見へり我其勢と察しり小甲信の軍勢と二より小甲  
より此方へ指向し合戦と始り勝敗ありて此味方越後へ

取

甲 せい

引退く本と晴信入道が旗本と以て川中橋より待受り戦ひ疲る  
 我が兵と人も残さばお捕んと企てるは母の後小移りも捕  
 明らかり其子細と云ふ海津の塔の煙きとつた小飯煙兩皮  
 又もつとめ定思案お遠あへるは我信玄が胸中小入るはと  
 我も我是と察しとるは其肺肝とらるが如し致の謀略と  
 亦ふとれは味方の勝利あり我信玄が謀と見ぬれと成れ  
 ば練信又もつとめと敷きて今夜亥の刻小兩のまの返りと誠武田  
 の正兵舟山に向つと時と接と隙は押遠さる信玄が旗本へ  
 押つとるは三三三三実入つて勝放と変しとるは如何し智勇の  
 晴信入道ありとも不意と討れて最後と云ふと本と我遠来と  
 承りけて信玄が將れは近付ぬれば法師が首と獲りけて目

日本書紀三編卷上



日本書紀三編卷上



我小向門と尾公就と等勅一士大乃等が生首と切申へ十二テ  
年の持符情と教ト討小を以て家留主のふと信じて解が山嶽の  
城と攻落しとる奴系と姑めち希生首と接てられんと各其用  
意せよ馬と書と信り吉と巻と嘶とべうは軍勢を牧と衛ま  
せと嘩しうぶうは世一戦とそは謙信が生首の面目は備へて  
と思ひ出ととの合戦あるぞや解落しられが上枝家の勇乃子雄  
の壯士等とては信じかと備へる各一各と後代は解えて世戦いよ有かと  
勇とては信時又用え細ひしは謙信と既小介副の物々と捕  
と投掛符の放生月毛の馬は打撃陣中とと然と大無と燒  
せ其夜まの上刻小徐く西條山と討まると兩のまの返りとと法  
と遙の川上の八代の返りと越と川中崎は打物るえ来謙信が

取

敵

軍法中一人小三人當の板と支度しられ教く強馬つど勇氣  
然として押さるるもして勝不敵の事秘是と古今の傳へ信  
玄謙信が川中崎の大合戦とて義法とては合戦の事あり

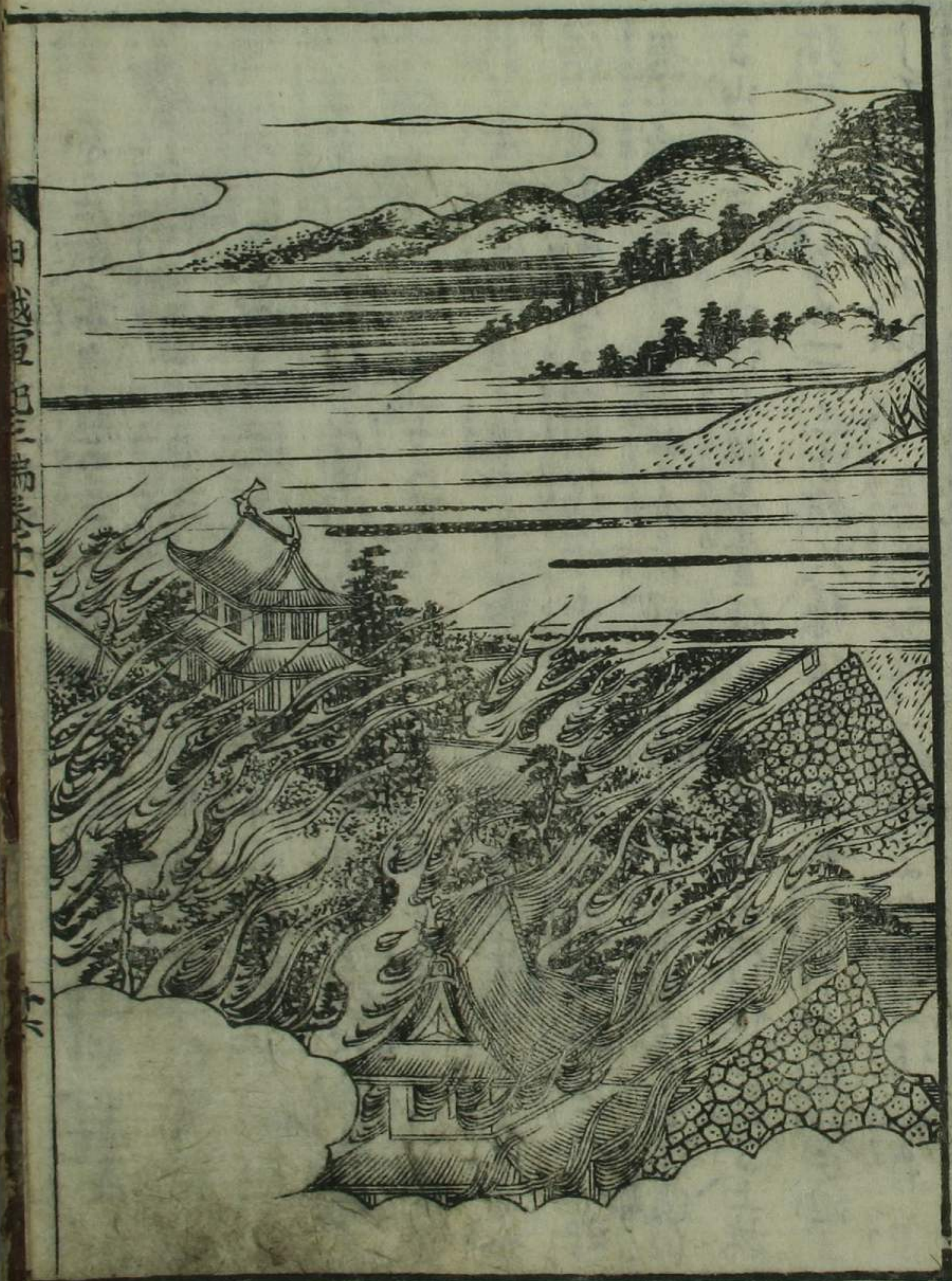
謙信の謀略と折

玄復中武同時信入道信玄が謀略を孫兵衛が温奥と叩き勝  
事と千里の外にゆきし奇兵の兵とから西兵と聞ふ事いと  
信一奇兵も其退くと討んとは上枝輝虎入道謙信又韓信  
孔明が肺腑と費く智将あり信玄が謀略とあふ其重きと  
討んと馬と書と信り人へ救と衛み八代の返りと打越川中崎  
に至る軍の切よのんで軍勢のな配あり先ちち挿時和泉  
守景家二千餘人と押さるる二のあふ大乃上枝入道謙信た乃

折敵  
謀略

甲

甲



甲越軍記三續卷上

十一



甲越軍記三續卷上  
信  
組  
之  
圖

甲越軍記三續卷上

十一

二敵

方へ本庄越前守越前守長宗因幡守治時右々山吉玄蕃尚気  
 親也條安藤守長胡次上安因上総介順易須田右衛門尉親  
 満北の方より上岡修理進景國古志強河守秀景守依是強  
 河守定仍右中村上左衛門義清加地安藤守千坂討馬後備又  
 耳槽近の守系時一千二百餘人必直以山味も兼續中行時を  
 仍と成て遙の後又備へり其外も相持播磨守守野野方馬介  
 新發回尾張守同因幡守上松壹波守珠織郷在は孫二郎  
 鬼小崎孫右衛門上野介色部修理亮齊藤下野守長尾遠江  
 守山本寺宮守代丸松系壹波守中條越前守竹保三河守上松  
 孫又弟とて一萬三子孫人謙信思ひまじり分一皆二子組  
 して雙方互に助け合一陰一陽あれ二備終はあれ二侍は後中操

甲越

越一屈伸往來とて以て車懸りの要とて斯の如く備へり  
 次舟小犀川の方へ近付る謙信が軍令外聞出候等の間  
 者の名當嚴密あれは武田の間者いくは偽り近付無入影  
 こそこれと極めて討捨られは武田の名を得し奇代の間者二十  
 餘人上松家右捕を多し其数と討小近付事越前守上松  
 が大軍犀川とて進むと兼て其糧の用意あれは其時  
 又尚の煮る事なく是兵船と極る形も其形も  
 り時々深間も窺ふ事ありと智者も謀事ありと  
 是ありと坂彈正間小精といひも謙信が川向は後  
 とあが信玄の智徳といふも先陣と脱して二陣は  
 事とあがしとて謙信十五軍以治の志と遂終は謙信



の謙信より不<sup>ふ</sup>しとて常<sup>つね</sup>通<sup>とほ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>良<sup>よ</sup>好<sup>こう</sup>と<sup>と</sup>禦<sup>ご</sup>へ<sup>へ</sup>き<sup>き</sup>あり

信玄<sup>の</sup>陣<sup>の</sup>備<sup>の</sup>陣<sup>と</sup>布<sup>と</sup>陣<sup>と</sup>

時<sup>とき</sup>小<sup>こ</sup>永<sup>えい</sup>祿<sup>りく</sup>四<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>九<sup>く</sup>月<sup>げつ</sup>十<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>の東<sup>ひがし</sup>方<sup>かた</sup>既<sup>すで</sup>一<sup>いち</sup>白<sup>はく</sup>あ<sup>あ</sup>んと<sup>と</sup>ころ<sup>ころ</sup>小<sup>こ</sup>比<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>秋<sup>あき</sup>

の未<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>雄<sup>お</sup>霧<sup>きり</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>照<sup>て</sup>尺<sup>せき</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>も<sup>も</sup>又<sup>また</sup>見<sup>み</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>と<sup>と</sup>武<sup>ぶ</sup>田<sup>た</sup>が<sup>が</sup>行<sup>ゆ</sup>

候<sup>こう</sup>曾<sup>そう</sup>々<sup>々</sup>知<sup>ち</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>信<sup>のぶ</sup>玄<sup>の</sup>と<sup>と</sup>先<sup>さき</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いち</sup>た<sup>た</sup>右<sup>みぎ</sup>と<sup>と</sup>後<sup>のち</sup>は<sup>は</sup>其<sup>その</sup>更<sup>さら</sup>々<sup>々</sup>

合<sup>あ</sup>戦<sup>せん</sup>の<sup>の</sup>是<sup>こゝ</sup>死<sup>し</sup>と<sup>と</sup>吉<sup>きち</sup>あり<sup>り</sup>ば<sup>ば</sup>心<sup>こゝろ</sup>汚<sup>よご</sup>り<sup>り</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>不<sup>ふ</sup>可<sup>か</sup>と<sup>と</sup>印<sup>いん</sup>上<sup>じやう</sup>刻<sup>こく</sup>は<sup>は</sup>及<sup>およ</sup>んで<sup>て</sup>相<sup>あ</sup>見<sup>み</sup>

深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>霧<sup>きり</sup>と<sup>と</sup>吹<sup>ふ</sup>雪<sup>ゆき</sup>一<sup>いち</sup>四<sup>し</sup>方<sup>かた</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>不<sup>ふ</sup>可<sup>か</sup>と<sup>と</sup>南<sup>なん</sup>方<sup>かた</sup>と<sup>と</sup>見<sup>み</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>これ<sup>これ</sup>は<sup>は</sup>

上<sup>かみ</sup>杉<sup>すぎ</sup>謙<sup>けん</sup>信<sup>のぶ</sup>一<sup>いち</sup>万<sup>まん</sup>三<sup>さん</sup>千<sup>せん</sup>餘<sup>りゆう</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>後<sup>のち</sup>雨<sup>あめ</sup>の<sup>の</sup>又<sup>また</sup>と<sup>と</sup>刻<sup>こく</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>妙<sup>めう</sup>捨<sup>しつ</sup>由<sup>ゆ</sup>

の東<sup>ひがし</sup>河<sup>か</sup>中<sup>ちゆう</sup>流<sup>りゆう</sup>の<sup>の</sup>後<sup>のち</sup>系<sup>けい</sup>は<sup>は</sup>大<sup>だい</sup>根<sup>こん</sup>の<sup>の</sup>折<sup>せ</sup>掛<sup>か</sup>の<sup>の</sup>纏<sup>まと</sup>期<sup>き</sup>嶺<sup>りやう</sup>小<sup>こ</sup>吹<sup>ふ</sup>で<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>先<sup>さき</sup>は<sup>は</sup>

押<sup>お</sup>き<sup>き</sup>忽<sup>たち</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>と</sup>上<sup>かみ</sup>杉<sup>すぎ</sup>一<sup>いち</sup>万<sup>まん</sup>三<sup>さん</sup>千<sup>せん</sup>人<sup>にん</sup>雄<sup>お</sup>旗<sup>はた</sup>陰<sup>かげ</sup>の<sup>の</sup>條<sup>ぢょう</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>軍<sup>ぐん</sup>備<sup>び</sup>

怒<sup>いか</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>相<sup>あ</sup>へ<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>武<sup>ぶ</sup>田<sup>た</sup>が<sup>が</sup>諸<sup>しよ</sup>勢<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>大<sup>だい</sup>は<sup>は</sup>仰<sup>おほ</sup>天<sup>てん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>時<sup>とき</sup>

間<sup>ま</sup>小<sup>こ</sup>新<sup>しん</sup>ふ<sup>ふ</sup>大<sup>だい</sup>軍<sup>ぐん</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>は<sup>は</sup>押<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>天<sup>てん</sup>より<sup>より</sup>中<sup>ちゆう</sup>流<sup>りゆう</sup>り<sup>り</sup>けん<sup>けん</sup>地<sup>ち</sup>より<sup>より</sup>浦<sup>うら</sup>浦<sup>うら</sup>

出<sup>い</sup>で<sup>で</sup>し<sup>し</sup>謙<sup>けん</sup>信<sup>のぶ</sup>小<sup>こ</sup>天<sup>てん</sup>魔<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>所<sup>ところ</sup>約<sup>やく</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>ころ<sup>ころ</sup>も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>雄<sup>お</sup>武<sup>ぶ</sup>田<sup>た</sup>の<sup>の</sup>勇<sup>ゆう</sup>将<sup>じやう</sup>猛<sup>もう</sup>士<sup>し</sup>

も<sup>も</sup>恐<sup>おそ</sup>怖<sup>おそ</sup>の色<sup>いろ</sup>と<sup>と</sup>影<sup>かげ</sup>諸<sup>しよ</sup>軍<sup>ぐん</sup>浮<sup>う</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>流<sup>りゆう</sup>石<sup>せき</sup>の<sup>の</sup>信<sup>のぶ</sup>玄<sup>の</sup>入<sup>い</sup>り

も<sup>も</sup>謙<sup>けん</sup>信<sup>のぶ</sup>が<sup>が</sup>迅<sup>じん</sup>速<sup>そく</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>驚<sup>おど</sup>ろ<sup>ろ</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>事<sup>こと</sup>小<sup>こ</sup>勅<sup>とく</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>名<sup>な</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>

世<sup>よ</sup>も<sup>も</sup>強<sup>つよ</sup>が<sup>が</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>不<sup>ふ</sup>可<sup>か</sup>と<sup>と</sup>信<sup>のぶ</sup>州<sup>しゆう</sup>先<sup>さき</sup>方<sup>かた</sup>は<sup>は</sup>士<sup>し</sup>浦<sup>うら</sup>野<sup>の</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>

大<sup>だい</sup>別<sup>べつ</sup>の<sup>の</sup>士<sup>し</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>謙<sup>けん</sup>信<sup>のぶ</sup>が<sup>が</sup>備<sup>び</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>仰<sup>おほ</sup>り<sup>り</sup>ば<sup>ば</sup>浦<sup>うら</sup>野<sup>の</sup>畏<sup>おそ</sup>て<sup>て</sup>馬<sup>うま</sup>と

馳<sup>か</sup>出<sup>い</sup>り<sup>り</sup>上<sup>かみ</sup>杉<sup>すぎ</sup>が<sup>が</sup>陣<sup>ぢん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>馳<sup>か</sup>得<sup>え</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>中<sup>ちゆう</sup>流<sup>りゆう</sup>謙<sup>けん</sup>信<sup>のぶ</sup>ハ<sup>ハ</sup>既<sup>すで</sup>は<sup>は</sup>

引<sup>ひ</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>告<sup>つ</sup>げ<sup>げ</sup>信<sup>のぶ</sup>玄<sup>の</sup>大<sup>だい</sup>は<sup>は</sup>不<sup>ふ</sup>可<sup>か</sup>と<sup>と</sup>謙<sup>けん</sup>信<sup>のぶ</sup>程<sup>ぢやう</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>霄<sup>せう</sup>より<sup>より</sup>引<sup>ひ</sup>取<sup>と</sup>

然<sup>しか</sup>して<sup>て</sup>長<sup>なが</sup>夜<sup>や</sup>と<sup>と</sup>待<sup>まち</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>程<sup>ぢやう</sup>と<sup>と</sup>行<sup>ゆ</sup>ど<sup>ど</sup>一<sup>いち</sup>戦<sup>せん</sup>小<sup>こ</sup>及<sup>およ</sup>んで<sup>て</sup>空<sup>ひら</sup>く<sup>く</sup>引<sup>ひ</sup>取<sup>と</sup>

へ<sup>へ</sup>手<sup>て</sup>傳<sup>つた</sup>り<sup>り</sup>引<sup>ひ</sup>取<sup>と</sup>る<sup>る</sup>体<sup>てい</sup>は<sup>は</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>行<sup>ゆ</sup>澄<sup>じやう</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>名<sup>な</sup>は<sup>は</sup>浦<sup>うら</sup>野<sup>の</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>謙<sup>けん</sup>

信<sup>のぶ</sup>味<sup>み</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup>備<sup>び</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>互<sup>たが</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>切<sup>き</sup>り<sup>り</sup>突<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>後<sup>のち</sup>も<sup>も</sup>野<sup>の</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>犀<sup>せき</sup>川<sup>がわ</sup>の方<sup>かた</sup>へ

日 武田 信玄 陣 備

一七三六

顔うれはと申上信を完と笑ひ移し是は陣野も笑へぬものなは  
 知るもこれ車縁の心とて車の心か如く備と探と決て同小敵の  
 旗本と我旗本と打合せ二戦は指放と交とる陣法甚は勝の備へ  
 あり謙信のうほと働く共の程は陣のあてきとて宣ひ重く諸我  
 入道とられ存儀はと糸れと作られは諸我畏く強く馬は一敵お  
 上松が陣近く馳出と大将の二言を誠と大切の事あり信を完と  
 とて初せは謙信の働く共何陣の車の有べきと作せとて  
 諸軍忽ちとて直に敵をば花くく戦ふと日比の勇威と  
 取いさんと各々色をばくどえへくうりは池清

繪本田敵軍紀三編卷之十一畢

アツク

